

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 21 日現在

機関番号：12611

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25770004

研究課題名(和文)カントと現代の知覚理論

研究課題名(英文)Kant and the contemporary theories of perception

研究代表者

中野 裕考 (NAKANO, Hirotaka)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授

研究者番号：40587474

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：カントと現代の知覚理論を題材にとり、古典哲学の内在的解釈と現代哲学の実質的議論との両立を試みた。一方では、現代哲学における知覚理論の展開がカント哲学の内在的理解に影響を及ぼしていることが分かった。つまりカントにおいて判断を伴わない知覚の理論は存在しないと考えられてきたが、近年、知覚を構想力の総合の産物として判断とは区別して扱う可能性が見出されつつある。また他方で、カント哲学の側から現代哲学に対して問題提起することのできる論点もあることが分かった。カントがいち早くその独特な働きに注目した、概念と直観の中間者としての図式である。この図式論の意義を究明することは現代哲学に資するところ大であろう。

研究成果の概要(英文)：Under the title of Kant and the contemporary theories of perception, I searched for compatibility between immanent interpretation of a classic philosophy and substantial discussion of the contemporary philosophy. On the one hand, the contemporary theories of perception have an influence to immanent understanding of Kant's philosophy. Indeed, before these theories, the possibility of treating perception without judgment has not been recognized. Thanks to the theories, now it is possible to consider perception as a product of synthesis of imagination, which is different from exercise of judgment. On the other hand, there is a possible contribution from Kant's point of view to the contemporary discussion. It is Kant's great discovery of the role of schema as the medium between concepts and intuitions. Kant's philosophy could contribute to the contemporary theories through exposing the exact content of the schematism.

研究分野：哲学

キーワード：知覚

1. 研究開始当初の背景

大陸哲学と英米の分析哲学との接近という潮流が日に日に顕著になってきている。我々の知覚がいかんして成立しているか、いかなる認知内容がそこに含まれているか、また知覚の条件には何が含まれているか、といったことがらを扱う知覚理論においても、同じ傾向が伺われる。知覚理論と言え、後期フッサールの生活世界論、ハイデガーの世界内存在の理論、さらにメルロ＝ポンティの知覚の現象学といった、ヨーロッパ大陸の現象学の中心的なテーマであった。しかし英米圏においても知覚の本性や、認識にとってのその役割についての議論が非常に活発である。この現代の議論の波及力は非常に大きく、英米圏でのカントやヘーゲルの見直しの機運もあって、古典哲学の研究者もその動向を無視することができないものとなっている。

カント研究の分野においてもこの傾向は顕著であり、現在では英米だけでなくドイツにおいても、直観と概念の間の関係を現代の知覚理論を背景として正確に捉えることが非常に多くの研究者の関心を集めている。この潮流によってもたらされた利益は、古典的なカント解釈が陥りがちだった二つの対極的な見方の限界が明らかになったことであった。すなわち、一方の極には、感性を通じて与えられた直観は、主観の側からのいかなる自発性の働きも前提せず、従っていかなる概念的内容をも含まない、とする立場がある(「所与神話」)。他方の極には、感性を通じて与えられた直観は、そのものとしてすでに概念を適用されたものであり、この概念適用は主観の自発的自覚的な判断を通じて実現するという立場がある(「主知主義」)。直観のうちに自発性を全く認めない一方の立場と、直観を判断の一契機としか見ない他方の立場は、現代の知覚理論でしばしば批判されている。

この点で最も典型的なのがメルロ＝ポンティ『知覚の現象学』の「序論」における執拗なまでの「経験論」(ないし生理学的アプローチ)および「主知主義」(ないし心理学的アプローチ)に対する批判であろう。メルロ＝ポンティ自身はカントを「主知主義」の陣営に組み込んでいるが、この解釈が必ずしも正しいとはいえない。メルロ＝ポンティが「経験論」と「主知主義」に加えた詳細な批判はそれ以降の知覚理論においてスタンダードなものとなった。それにともなって、上述の、カント研究において古典的な二つの解釈も、カント解釈としては命脈を保っているかもしれないが、事柄に即して考えた場合にはすでにその限界が明らかになっている。現代の知覚理論、とりわけウィルフリッド・セラーズやジョン・マクダウェルらの主張などを背景としてカントを理解することで可能になる見方は次のようなものである。直観のうちに主体の自発性と概念的能力を見てとりながらも、この自発性と概念を判断の産

物としてではなく判断に先立って与えられるとみなすというものである。近年発表してきた著書、論文で私は、このようなカント理解が、決して現代の理論を過去の哲学者に押しつけることで得られるものではなく、むしろカントに固有の論理がこのような理解を要求していることを論証するよう努めてきた。つまり、カントに厳密に内在的な研究として上述の、現代の知覚理論と極めて近い理論が導出される、と主張してきた。これまでの研究を踏まえて本研究において試みてみたいのは、これまでに得られたカントに内在的な知覚理論を、現代の知覚理論と直接突き合わせ、両者の相違を明らかにし、そうしてカントに固有の視点から現代の知覚理論に積極的な寄与を行うことである。

私見によれば、カントの知覚理論と現代の知覚理論は、本来は相乗効果を生み出すような関係にあるにもかかわらず、この関係はまだ十分に認められるには至っていない。相乗効果とは次のようなことである。すなわち一方で、現代の知覚理論を背景とすることで、上述のように従来のカント研究では十分に評価されてこなかった側面に光を当て、解釈の幅を広げることができる。具体的に言えば、カントのいう「直観」を「所与神話」か「主知主義」かのどちらかに決めつけるのではなく、判断の産物ではないけれども全く自発性を含まないというわけでもなく、むしろ実践的、運動的な主観の自発性を前提するものとして理解するという可能性である。他方で、カント哲学の解釈可能性を、それ自身の論理に即して展開することで、逆に現代の議論に独特な寄与を行うことができる。カントの知覚理論の場合に極めて特徴的なのはその空間時間概念、外的触発と内的触発の理論だが、これらの諸概念を現代の知覚理論へと投げ返すことで、現代の議論にとっても新鮮な論点を提供できるのではないかと思われる。カントが直観のうちに主観の運動を読み込まなければならなかった理由は、そうしなければ時間のうちの直観受容が不可能になってしまうからである。そして時間とは主観の内的触発、すなわち自発性と受容性の相互関係における受容性の形式であるが、そのような時間は自らを直線という空間的な像へと変じるかぎりで開かれるような地平である。このようなカントの時間論、内的触発論の意義は、ハイデガー『カントと形而上学の問題』によってわずかに評価されたことがあるとはいえず、まだまだ十分に汲みつくされてはいない。それどころか、とりわけストローソン以来の英米の研究者はこの理論を非常に誤解する傾向が強いこともあって、カントの内的触発論が現代の知覚論に寄与するには至っていない。しかしこれまでの研究の結果、内的触発と外的触発の区別は本来、知覚過程における受容性と自発性の関係について、現代の理論では考慮されていないが重要な観点を提供するするものなのではないかと、私

は考えるに至った。本研究で主に取り組みたいのは、このようにカントに固有の論理を展開させることから見えてくるような、現代の議論にとっても新鮮な論点を、現代の議論に着床させるという作業である。

## 2. 研究の目的

何よりも肝要なのは、次の諸点を明らかにすることである。第一に、そもそもカントに知覚理論があること、そして第二に、もしあったとすればその理論と現代の知覚理論のコンテクストの異同である。第一の点は、私の従来研究成果を取りまとめることで示すことができるように思うが、第二の点には新たに組み込まなければならない。ここで検討されるべき論点は次のようなものと考えられる。第一に、知覚の条件として主体の運動を挙げることが必要だったとして、その「運動」をどのように理解するか、とりわけ「身体」との関係はどう説明するか。第二に、現代の知覚理論では知覚が明示的な意識を伴わない「サブ・パーソナル」な過程なのかどうかという問題があるが、この点についてカントではどのような見方が得られるか。第三に、翻って現代の知覚理論において、知覚の成立における時間性、受容性がどう位置づけられているか。とりわけ時間と主体の自発性と受容性の関係がどのように説明されているか。この問題は、ハイデガーの超越概念やメルロ＝ポンティの時間論を通覧することだけでなく、アルヴァ・ノエやジョン・マクダウェルにおける受容性の扱いを調査することをも要求する。内的触発と外的触発というカントの概念装置を踏まえることで現代の議論には見落とされている論点を明示したい。

## 3. 研究の方法

現代の知覚理論に関する概観を得ることを第一の課題とする。その対象は主に二つの系列に分けることができる。第一は後期フッサールの生活世界論、ハイデガーの世界内存在の理論、メルロ＝ポンティの知覚論である。第二は主に英米圏で現在進行中の知覚理論であり、現在進行中であるがゆえにフッサール、ハイデガー、メルロ＝ポンティを踏まえた議論が行われている。本研究も、第一の系列そのものに重点を置くというよりは、第一の系列を踏まえて現在進行中の議論を把握することを主要な課題とする。

とはいえ現代の知覚理論そのものに特化した研究ではなく、あくまでもカントの知覚理論と現代の知覚理論の対話を目的としているため、本研究にとって重要となってくる諸理論を効率的に選定しなければならない。現代の英米圏の議論においては、ハワード・ロビンソンが定式化したように真正なる知覚と錯覚や幻覚の間に共通の類を認めるのかどうかという点が重要になっている。けれどもカントの知覚理論との対話に際しては、

この点を掘り下げることとはそれほど有益ではない。むしろジョン・マクダウェルやロバート・ハンナらの行う概念主義論争に着目することが有効である。つまり知覚内容として概念的な内容だけを認めるのか、それとも本質的に概念に還元できない内容を認めるのかという問題である。

これらの現代の知覚理論をカントの、特に外的感官の形式としての空間、内的感官の形式としての時間という独特な概念を伴った知覚理論との対話へともたすため、それに応じた調査方法を探りたい。すなわち現代の知覚理論における諸論点を全面的かつ一様に概観するのではなく、空間、時間、運動、受容性、自発性といった、本研究にとって特に関係の深い諸側面が、現代ではどのように扱われているかという点に重点を置いた考察を行う。この考察は与えられた知覚の本性を分析するというよりは、知覚が与えられる過程ないし条件の分析であり、特にアルヴァ・ノエとの比較が有効である。

以上を踏まえて、カントと現代の知覚理論に共通する発想、ならびに両者が位置するコンテクストの違いに関して、次の各項目を具体的に明確化する作業に入る。

・現代の知覚理論の光を当てることで理解可能になったり、展開できるようになったカント解釈の可能性

直観と概念の関係は、18世紀末以来一貫してカント解釈における中心的なテーマである。ただし後期フッサールによる前述定的な意味の分節化の可能性の発見、メルロ＝ポンティによる身体性の再定義、さらには分析哲学的な、概念主義と前概念主義の批判的検討等々、20世紀の議論を踏まえることで、難解で、ときには不明瞭な主張を解釈する幅が広がることも事実であろう。いかなる点でカントの解釈可能性が広がったか。

・現代の知覚理論とカントにおいて共有できない諸前提、ないし両者の異質性

形而上学の基礎を確保するために認識の妥当性の範囲を画定することを目的とするカントの理論哲学と、知覚過程の解明そのものや、あるいは認識の可能性の条件の解明そのものを目的とする現代の理論とでは、当然ながらもともとコンテクストにずれがある。またカントがカテゴリーの不変性を疑わなかったことなど、200年以上の時間的隔たりに起因する異質性もある。知覚理論においてこうしたずれや異質性はどのような論点の違いとして確認されるか。

・現代の知覚理論において描かれやすいカント像の特徴とその妥当性

カントが批判的に言及される場合でも、また現代の知覚理論の先駆者として評価される場合でも、カントの学説が詳細に論じられることはほとんどなく、かなり単純化されてしまう傾向があるように見える。こうして単純化されたカント像がどの程度妥当なものなのか、それによって見落とされてしまうこ

とはどのようなものか。

・カントに固有の概念装置を通じて考察することができる論点を現代の知覚理論に投げかけることで開かれる見通し

内的触発、外的触発、空間時間の超越論的観念性、統覚や構想力といった、現代の議論ではあまり踏まえられないことのないカント独特の概念装置は、本当に現代の議論にとって不要のものばかりなのか。むしろこのような古めかしく敬遠されている諸概念のうちには、現代の議論であまり開発されることのない論点を開く潜在力を秘めたものがあるはしないか。

#### 4．研究成果

国際学会での研究発表が採択され、また国内におけるこの分野の主要な学術雑誌への掲載が認められた論文が2本あり、順調に成果を挙げられたと思われる。

#### 5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

中野裕考 「観念論論駁覚書に現われた特異な主題群」『日本カント研究』第 巻 2015 年(採用決定)

中野裕考 「概念主義論争におけるカントの位置」『哲学』第 号 2015 年(採用決定)

〔学会発表〕(計 1 件)

Nakano, Hirotaka, “Kant and French Phenomenology on Self-Affection”, 12. Internationalen Kant-Kongresses, 22, September, 2015, Wien (Austria)

#### 6．研究組織

(1)研究代表者

中野 裕考 (NAKANO, Hirotaka)

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授

研究者番号：40587474

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：